

新中華遺選拔作品集



花の心をいける

作品集発行にあたって

家元 西村 雲 華

「花は野にあるように」千利休の言葉です。

「一色を一枝か二枝でかるくいけるがよし」と論されたようです。利休が茶人であり、華人でない限り、花を野にあるそのままの情景をいけたとは思われません。野から切りとった一枝、一輪の花にかよう心のふれあいをいけよ、という論じだと思えます。

いけばなは、自然の美を、そのままに伝え、いけるものでなく、人間の心を通して、その人間性（美的体験も）の中から、新しい美の創造を形成するところに華道としての本質があると思えます。花と自分が一体となって、はじめて「花の心」をいやすことができる。それには、いける人の心の形成がより大切なことだと思えます。それでこそ、次元の高い芸術としてのいけばなが生れるのではないのでしょうか。

私の華道生活25年。体験は極めて浅い中にも、迷路の多い華道という花の道を私なりに迷わず、歩み続けて来ましたが、お陰でその道中には、新潮花の発見あり、新生花の格境あり、雅風花の風興地あり、素晴らしい佳境を新たに発見しながら尚且、終着のないこの道を、幸いにも一門とともに歩み、お互に励ましあって、新日本華道50年をふり返りながら、体得した様々な花えの情熱を、写真作品にまとめてみました。

作者の人間性によって、又、見る人の心境によって様々にうけとめられることと存じますが、私の華道への信念が、そして同行した一門の新日本華道への熱情が少しでも感じられますならば、私の幸せ之に過るものはないと存じます。

ご高覧の上ご批判賜りますようお願いいたします。